

桜美林大学

環境報告書



表紙の写真：境川クリーンアップ作戦

境川クリーンアップ作戦は、町田市と相模原市の間を流れる境川の清掃活動を通して、環境保全だけでなく、生活圏や経済圏を共有する町田～相模原の行政区分を超えた交流とまちづくりを目指した活動です。境川クリーンアップ作戦実行委員会が主催、相模原市・町田市が後援しています。毎年、桜美林大学からは桜美林大学体育文化団体連合会（体育会や文化系クラブ）を中心に千人余の学生・教職員が参加し、境川の美化に取り組んでいます。桜美林学生と地域のボランティアの方々との交流も見られ、大いに活気のあるイベントとなっています。



(写真は2014.7.29)

2014年10月

編集・発行：桜美林大学環境研究所
〒194-0294 東京都町田市常盤町 3758

電話 042-797-2661(代)

<http://www.obirin.ac.jp>

この環境報告書へのご意見をお寄せください

kanken@obirin.ac.jp





学長ご挨拶

対前年度比でCO₂を5%削減、廃棄物は15%削減



2014年度版桜美林大学環境報告書を発行いたします。本環境報告書では、2013年度の本学のエコキャンパスの現状や大学・学生の取組をご紹介します。

2013年度のエコキャンパスの現状としては、前年度に対し、町田キャンパスのCO₂を5%、廃棄物を15%削減することができました。町田キャンパス(大学ゾーン)では、エネルギー消費量は猛暑などの影響で前年度に比べ4%増加しましたが、天然ガスを燃料とするよりCO₂排出の少ない特定規模電気事業者の電力に切り替えたため、結果としてCO₂を削減することができました。また、廃棄物については、

学生を始めとする関係者の環境意識の高まりにより、排出量が前年度に比べ15%削減し、リサイクル率は35%となりました。環境意識の高まりに、この環境報告書が貢献していることを期待します。

環境報告書の作成にあたっては、昨年度に引き続き、大学生や大学院生も編集に参加し、より身近でわかりやすい環境報告書を目指しました。特に5年目となる今年は、学生からの意見を踏まえて、全ページフルカラーで見やすいものとなりました。

この環境報告書が、在学生、教職員はもとより、学外の関係者の皆様に本学のエコキャンパス化に向けた取り組み状況を理解していただく一助となることを願っております。

桜美林大学 学長
三谷 高康

目次

学長ご挨拶	1
桜美林大学町田キャンパスの花ごよみ	2
桜美林大学エコマップ 2014	4
1. 桜美林大学のエコキャンパスに向けた現状と取組	6
2. 桜美林大学での環境の学び	
ECO-TOP プログラム、東京グリーンキャンパス・プログラム	8
国際協力フィールドワーク	10
桜美林大学大学院国際学研究所国際協力専攻	12
3. 桜美林大学の環境に関する社会貢献	
小学生向け公開イベント、高校生向け環境科学講座、境川クリーンアップ作戦	14
環境研究所公開講演会シリーズ「原発問題を考える」	16
4. 学生主体の活動	18
環境報告書 2013 年度版を読んで	20
編集後記	21

桜美林大学の概要・環境報告書基礎的事項



環境報告書について

環境報告書の目的：桜美林大学の環境保全に関する取組を在学生、教職員、桜美林学園と関わりのある全ての方々に報告するものです。

報告対象組織：桜美林大学のうち町田キャンパス

報告対象期間：2013年度の環境負荷データや環境保全活動を対象としています。発行が2014年度のため、「2014年度版」としました。なお、学生のインタビューなど、一部に2014年度半ばまでの情報を含みます。

製作・編集：桜美林大学環境研究所が桜美林学園施設・管理部ほか関係部署の協力を得て製作しました。公募による4名の学生編集委員が編集に参加しました。

学生主体の活動や社会貢献活動は、学生編集委員が情報を収集し、インタビューを依頼して受諾いただいたもの等を掲載しています。したがって、桜美林大学の全ての活動を網羅しているわけではありません。



桜美林学園の環境保全の目標

桜美林学園中期目標(2010年公表)には、「エコ・キャンパスの実現」として数値目標が位置づけられています。

学園の中期目標 (2010年度～2014年度)

CORNERSTONE 11： 質量両面でのキャンパス高度化 (中略)

4. エコ・キャンパスの実現
エコ・キャンパスを意識した取り組みを積極的に推進し、2009年度施設面積当たりの消費エネルギーを5年間で10%程度削減する。

学生数

学群・学部	8393
大学院	377

教職員数 ・大学教員

専任	280
非常勤	584
合計	864

・職員数

専任	163
非常勤	132
合計	295

(2013年5月1日現在)

桜美林大学町田キャンパスの花ごよみ

2013年度の花ごよみ調査結果（一部を抜粋）

種名	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
オニタビラコ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
キュウリグサ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ノゲシ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
コハコベ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ノミノツツリ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
スズメノヤリ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ツバキ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ナズナ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
タネツケバナ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
カラスノエンドウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ノボロギク	●	●	●	●	●	●	●	●	●
タチヌノフグリ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
オオイヌノフグリ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ハナミズキ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
オランダミミナグサ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
カワヅザクラ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
フキ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ブタナ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
アカバナユウゲショウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ハハコグサ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
スズメノカタビラ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
カタバミ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
オッタチカタバミ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ツメクサ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
コケリンドウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ノビル	●	●	●	●	●	●	●	●	●
コメツブツメクサ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ナガミヒナゲシ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ミゾイチゴツナギ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
アオカモジグサ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
クスノキ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
シバ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ツボミオオバコ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ハルジオン	●	●	●	●	●	●	●	●	●
セイヨウタンポポ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
スズメノエンドウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
マツバウンラン	●	●	●	●	●	●	●	●	●
カスマグサ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
タチツボスミレ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
アカマツ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
スミレ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
キランソウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ケナシチガヤ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ツルニチニチソウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ドウダンツツジ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ヒメオドリコソウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ヤエムグラ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
レンギョウ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
トダシバ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
イヌホオズキ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
イヌガラシ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
カゼクサ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ササガヤ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ウリクサ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
コネズミガヤ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ヨモギ	●	●	●	●	●	●	●	●	●

●：花やつばみの記録、●：果実の記録
 ◇：オニタビラコ、ブタナ、アカバナユウゲショウは春から秋までずっと花を咲かせる。
 *：ノゲシやオッタチカタバミは、夏の暑い時期を休んで、春と秋に2回花を咲かせる。
 ※：タネツケバナやタチヌノフグリは4月までで花期を終わらせる。



コハコベ



オオイヌノフグリ



オッタチカタバミ



コケリンドウ



マツバウンラン



ハルジオン



キュウリグサ



ノゲシ



アカバナユウゲショウ



フキ



葉だけのショカツサイ



花が咲いたショカツサイ



カタバミ



調査風景



ヒメオドリコソウ

ここでは、木場研究室の3年生が継続的に行っている花ごよみ調査の意義と成果の一部を紹介します。

「花ごよみ」とは、同じ調査場所を定期的に観察して、植物の開花や結実の情報を記録する調査です。調査の結果は一枚の表にまとめられます(表)。

この表があると季節によって咲く花の種類が変わっていく様子がわかります。植物に詳しくない人が種名を調べるときには、今の季節に咲いている植物に限って検討すればよいので容易になります。さらには、植物の蜜や実を食物として利用する昆虫などの動物にとって、その場所がどのような環境であるかを知る基礎資料にもなります。

このような生物学的意義があるので、同様の調査はいろいろな場所で行われています。神奈川県全域(神奈川県植物誌調査会編 2008)で行われたり、より小地域(佐藤恭子編 2004 など)で行われたり、他の大学のキャンパス(高橋英樹ほか編 2005)でも行われています。

我々の研究室では、毎年、町田キャンパス内の一部に観察区域を設定し、3月から11月まで毎月1回ずつ同じコースを歩いて調査しています。この調査は2010年に始め、毎年、違うコースを調査しています。2013年度は荊冠堂と徳望館、研究棟B棟の周辺を調査区域にしました(写真 調査風景)。2014年度でキャンパスの全域の調査が完了する予定です。

この調査をこれから植物学を志す大学生が行うことには、3つの良い教育効果があると考えています。

第一に、すべての種に目を向けさせるというものです。とくきれいな色の大きい花を咲かせる植物には興味をもって、地味な花には気付いてくれないことが多くあります。この調査では、開花・結実しているすべての種を記録するので、イネ科植物のような目立たない植物にも関心を寄せさせる効果があります。

第二に、花期以外の植物の形に目を向けさせます。もっとも種を見分けやすいのは、その種の特徴がよく現れている花期ですが、左図のカタバミやショカツサイのように幼植物やロゼットの状態の植物も見分けられるようになります。そのためには葉の細かい形や手触り、質感、色など、あらゆる点に注目して植物を見る姿勢が要求されます。

第三に、季節感を養うということです。たくさんさんの植物の種に関する情報を頭の中で整理して覚えるためには、ふつより鋭い季節感が大切です。単に「春の植物」というだけではなく、「ゴールデンウィークの少し前のころに咲いていた」のような、より詳細な季節と種名を結びつけることができるようになります。入門者がこのような季節感の下地を作ることは、それ以後、多くの植物を学んでいくのに役立ちます。

木場英久(リベラルアーツ学群(生物学専攻)教授)・2013年度専攻演習履修生

引用文献
 ・神奈川県植物誌調査会編『神奈川県の花ごよみ 2003・2004年度の調査報告』(2008年 神奈川県植物誌調査会)
 ・佐藤恭子編『清川村の花図鑑』(2004年 清川村企画財政課)
 ・高橋英樹・露崎史朗・笹賀一郎・齋藤貴之編『北大エコキャンパス読本 植物編』(2005年 北海道大学教育GP「博物館を舞台とした体験型全人教育の推進」・北海道大学博物館)



4 5 7 8 11 12 明々館・太平館・
碩学会館・理化学館・更賜体育館・待望館、
けやきの広場・三角駐輪場
などの主要な外灯
LED照明

LED（発光ダイオード）照明は発光効率が良く（少ない電気で明るい）、長寿命なため、省エネに加え、省資源・廃棄物の発生抑制の点からも優れています。東日本大震災後、さらに導入を進めています。



9 理化学館
地中熱利用

地中は年間を通して一定温度である（夏は涼しく、冬は暖かい）ことを利用して、1階の空調機の外気取り入れパイプを地中に埋設し、省エネを向上させています。

9 理化学館
大気環境ステーション

理化学館屋上では、気象のほか、窒素酸化物などの大気汚染物質濃度を24時間自動計測しています。



10 桜寮
太陽熱温水器

太陽光に含まれる赤外線を利用して水を温め、給湯に利用しています。お湯を沸かす燃料が少なくて済みます。



8 9 荊冠堂・理化学館
雨水利用

雨水を貯めてトイレの洗浄用水、消火栓として利用しています。（雨水が不足する時は水道水が供給されます。）節水になります。

学内全エリア
分別ゴミ箱

学内では、紙類、ビン・カン・ペットボトル、一般ごみなどに分別しています。



5 崇貞館
生ゴミ処理機

崇貞館裏には生ごみ処理機があり、桜カフェなどからの調理くずを土壌改良材にしています。できた土壌改良材は、けやきの広場の花壇や桜美林中学校に利用しているほか、近隣の方にもお配りしています。



4 5 太平館・崇貞館
地下水利用システム

普段はトイレ、雑用水（掃除用等）として使用しています。適切な地下水利用は節水になるほか、地震等の災害時の水源になります。



学内全エリア 樹木札
学内の71種の樹木に約150枚の樹木札が付けられています。

3 4 9

学而館・明々館・理化学館
屋上緑化

学而館・明々館・理化学館では、屋上を緑化しています。屋上緑化は気温を下げる（ヒートアイランド対策）、建物の断熱性の向上（省エネ）、都市の保水力の増加、大気汚染物質の吸収・吸着、生態系の回復などの効果があります。



1 スクールバス発着所
ハイブリッドバス

ディーゼルエンジンと電池・モーターを組み合わせた「ハイブリッドバス」。従来のバスに比べて大気汚染物質の排出が少なく低燃費なエコカーです。現在、3台導入されています。



2 一粒館前
風車（さくらかぜⅠ号）

風車で発電した電気は一粒館玄関前のコンセント回路に供給しています。



2 一粒館
太陽光発電

太陽光で発電した電気は一粒館の電気系統で利用しています。



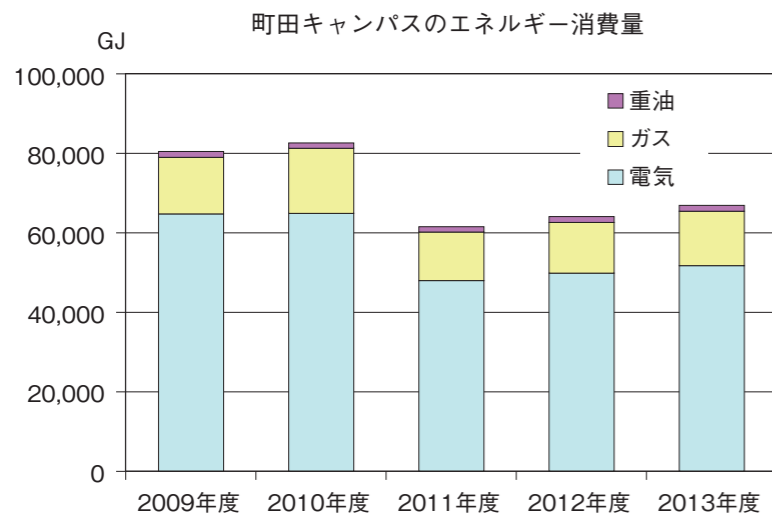
2 3 4 5 6 9 一粒館・学而館・明々館・崇貞館・
栄光館・理化学館
ガスヒートポンプ、エコアイス

ヒートポンプは、投入したエネルギー以上の熱エネルギーを利用できるとも省エネ性能に優れた冷暖房機器で、オゾン層を破壊しない冷媒を使用しています。学而館のヒートポンプは、夜間電力で氷を作り昼間の冷房に利用することでピーク時の電力消費を下げる氷蓄熱式で、エコ・アイスグリーンラベル認定品です。



1. 桜美林大学のエコキャンパスに向けた現状と取組

INPUT (資源の消費)

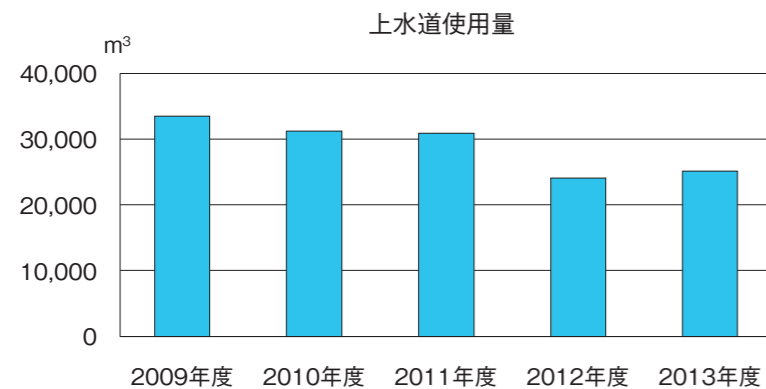


町田キャンパス (大学ゾーン) における2013年度のエネルギー消費量は66,832GJ (注)でした。施設面積あたりのエネルギー消費量でみると0.84GJ/m²となり、2009年度の1.01GJ/m²に比べると17%の削減となります。学園の中期目標である「2009年度比10%程度削減」を引き続き達成しています。

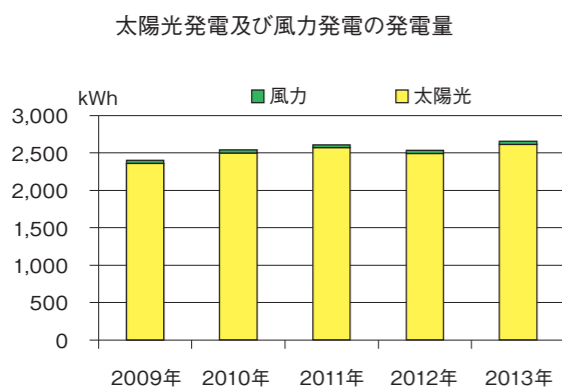
これは東日本大震災に対応して2011年度に大幅な省エネがなされ、それが継続していると評価できますが、少しずつ増加 (2013年度は対前年度比4%増) しているので、継続した省エネが必要です。

町田キャンパス (大学ゾーン) における2013年度の水道使用量は25,104m³でした。桜美林大学では、上水道のほか、雨水、地下水を利用し、水使用量の削減に取り組んでいます。荊冠堂及び理化学館に雨水利用システムがあり、雨水を貯めてトイレの洗浄用水、消火栓として利用しています。太平館と崇貞館では地下水を汲み上げて利用しています。

地下水は適正な量を利用するのであれば、上水道の節約になるほか、災害時の給水に役立ちます。



再生可能エネルギー発電量



学生団体 ASiAWiNDRiNG の発案により、スクールバスが発着する一粒館前に風車 (さくらかぜ I 号) が、また一粒館屋上には太陽光発電が設置されています。桜寮では太陽熱温水器を利用しています。

2013年 (1月～12月) の風力発電量と太陽光発電量の総合計は2656kWhで、これは1世帯当たりの年間電力消費量のおよそ7割、一粒館学面館ゾーンの同期間の電力使用量のおよそ0.5%に相当します。

(注) 電気、ガス、重油の使用量はそれぞれ kWh、m³、L で表されます。これを比較するために、エネルギーの単位である「GJ (ギガジュール)」に換算しています。換算係数は、電気:9.76 GJ/ kWh、ガス:45.0 GJ/ m³、重油:39.1 GJ/ kL です。なお、町田キャンパスの電気は特定規模電気事業者 (PPS) の電力の換算係数です。

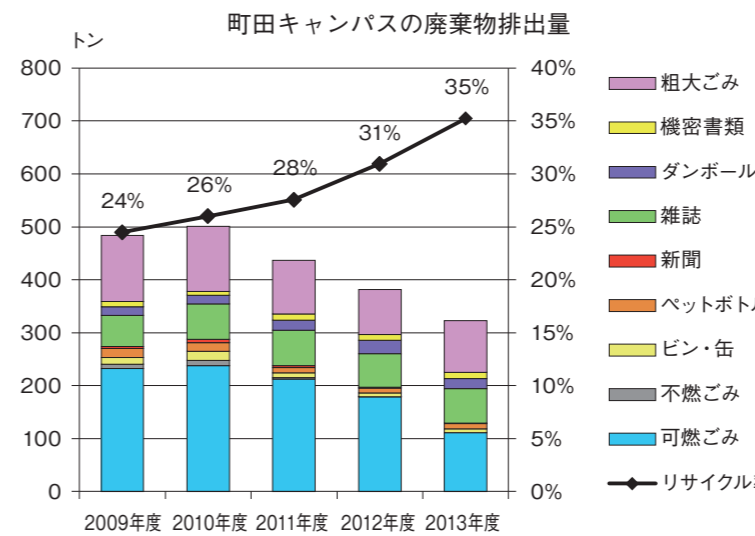
OUTPUT (環境への排出)

町田キャンパスの CO₂ 排出量

	2013年度消費量	CO ₂ 排出係数	CO ₂ 排出量 (トン)	
施設	電気	5,294 千 kWh	0.364 CO ₂ -ton/ 千 kWh	2,135
	ガス	306 千 m ³	2.24 CO ₂ -ton/ 千 m ³	687
	重油	35.4 kL	2.71 CO ₂ -ton/ kL	96
	施設設計			2,710
バス燃料	153 kL	2.58 CO ₂ -ton/ kL	393	
合計			3,104	

町田キャンパス (大学ゾーン) の2013年度のCO₂排出量は3,104トンでした。昨年度は3,260トンでしたので、対前年度比5%減少となりました。

町田キャンパスの電気は東京電力から購入していましたが、東京電力は東日本大震災以降、原子力発電所を停止し、火力発電を増加させたため、CO₂排出係数が大きくなっていました。2012年度半ばから、天然ガスを燃料とし、よりCO₂排出の少ない特定規模電気事業者 (PPS) の電力に切り替えたため、結果としてCO₂排出量が前年度より減ったものです。



町田キャンパス (中高を含む) の2013年度の廃棄物排出量は323トンと対前年度比15%減少し、リサイクル率は35%と前年度より増加しました。2012年度の廃棄物排出量は381.4トンで、2011年度に比べると55.5トン減りました。種類別にみると、生ごみなどの可燃物が大きく減少しました。廃棄物のうちビン・缶、ペットボトル、新聞、雑誌、ダンボール、機密書類、生ごみの一部をリサイクルしています。しかし、なお1日おおよそ1トンの廃棄物が排出されており、また可燃ごみの中には分別すればリサイクル可能なごみも含まれています。一層のリデュースや適切な分別を進める必要があります。

2013年度の取組 (トピックス)

学内の電気使用量を見る化

2013年6月より、「電気の見える化」サイトを開設。大学東エリアの電気使用量を30分単位で計測した値を閲覧できるほか、季節毎に定める目標使用電力上限に対する電気使用率等を確認できます。



トイレを節水・省エネ型に

太平館2階のトイレが新設されました。夜間や休日のまったく使用されない時間帯は便座ヒーターと温水ヒーターを自動的に切って効率的に節電するオフタイム節電が搭載されています。また、陶器表面をツルツルにし、汚れの付着力を弱めること、渦を巻く水流を使うことなどで大幅な節水効果が期待できます。このトイレは、従来のトイレと比べ、水量を約1/4にするとともに、CO₂を約3トンも削減できます。

毎日何気なく水を使っていますが、水の利用は、浄水場や下水処理施設で水を処理するときやポンプを使って水を汲み上げるときなどにたくさんの電力を使っています。水を節約することが結果的に節電にもつながるのです。



2. 桜美林大学での環境の学び

ECO-TOP プログラム

ECO-TOP プログラムとは

ECO-TOP プログラムとは、東京都が2008年度から設けている、“自然環境に軸足を置いたジェネラリスト”を育成する人材育成・認証制度です。桜美林大学では、2009年度に都の認定を受け、2010年度よりプログラムがスタートしました。桜美林大学の学生であれば、誰でもECO-TOP プログラムに登録することができ、所定の科目（インターンシップを含む）を履修して単位を修得すれば、卒業と同時に東京都より知事名の修了者登録証が授与されます。修了者は卒業後も東京都からフォローアップがあります。

プログラムの特徴は、民間企業、NGO/NPO、行政における合計20日間のインターンシップです。インターンシップの成果は、学内の報告会のほか、認定大学による合同報告会で発表されます。

ECO-TOP プログラムが目指す人材像 “自然環境に軸足を置いたジェネラリスト”

- 1 自然環境保全に向けてさまざまな主体と協働できる能力がある人
- 2 一地域の現場から、次世代を見据え、グローバルな視野に立って自然環境を考えることができる人
- 3 論理的思考力と説明・コミュニケーション能力がある人
- 4 決定能力とリーダーシップがある人
- 5 現場感覚を持ち、アクティブに行動できる人

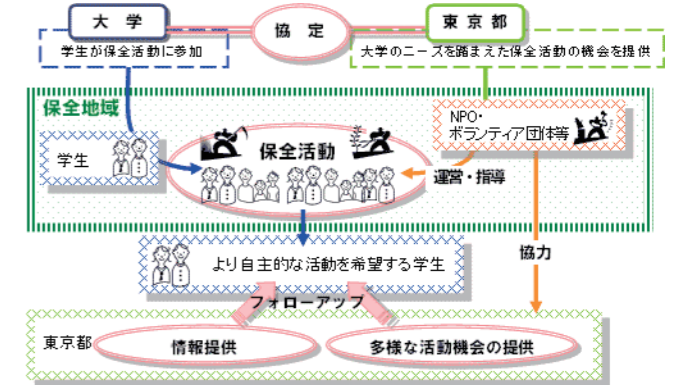


2013年11月24日に東京都庁で開催されたECO-TOP プログラム認定大学合同のインターンシップ成果報告会において発表するリベラルアーツ学群3年栗林愛さん（写真中央）

東京グリーンキャンパス・プログラム

東京グリーンキャンパス・プログラムとは

東京グリーンキャンパス・プログラムは、東京都と大学が協定を結び、次世代の担い手である大学生に緑地保全活動に参加する機会を提供し、緑の保全に対する関心の喚起や行動力の醸成を促すことを目的とする東京都の事業です。桜美林大学は2008年度にこのプログラムの第1号として認定され、七国山緑地保全地域（町田市山崎町及び野津田にまたがる地域）において、「七国山自然を考える会」と連携して雑木林での下草刈、萌芽更新作業、自然観察などの緑地保全活動を行っています。2013年度には4回の緑地保全活動を行いました。



図及び写真提供：東京都

国際協力フィールドワーク

国際協力フィールドワークとは

桜美林大学では、「教養豊かな識見の高い国際的人材を育成する」ことを目標としています。多様な海外留学・研修プログラムの内、夏休み・春休みを利用した短期留学プログラムの一つとして、「国際協力研修プログラム」が実施されています。国際協力研修プログラムの目的は以下のとおりです。

- ① 講義や書籍・映像などを通じて知識として知っている、世界の貧困の現状や課題について、現地へ行き、自らの五感を使って、新たに感じ・気づき・考える。
- ② 開発を取り巻くさまざまな人々に出会い・話し、また自ら現場を体験することにより、「国際協力」や「開発」を取り巻く現状・諸問題に気づき・考える。
- ③ これらの現場研修を通じ、世界の貧困の現状や課題を、日本に住む「わたし」が、遠い国の他人事ではなく、同じ地球に暮らす一人ひとりとして「自分事」として捉える視点を養う。

- ④ その上で、「わたし」が、世界に暮らす人々と、これからどのように関わっていけばよいのかについて考え、行動するきっかけをつかむ。

特に、「持続可能な開発」を考えるフィリピン研修では、フィリピンの都市及び地方における様々な課題と、その課題を解決するための活動を自分の五感を使って、また直接現地の人と話すことを通して、開発とはどうあるべきかを学びます。前半は提携校であるアテネオ・デ・マニラ大学の社会貢献プログラムに参加し、スラムやゴミ山訪問等を通して、主に都市での貧困について考えます。後半は地方で、ホームステイも体験しながら、フィリピン最大の NGO である PRRM (フィリピン農村復興運動) の環境保全にも配慮した村落開発活動を通じて、農村部での持続的な開発について考えています。



「同じ目線で考える」 健康福祉学群 3年 木山由香子さん (フィリピン研修 2013)



海外の子ども、特に発展途上国の子どもたちと遊んでみたいと思いこの研修に参加しました。研修に参加する前は、開発途上国の子供たちは暗い表情だろうと思っていたのですが、フィリピンのスラム街に行った際、多くの子どもたちが私たちのことをとても明るく迎え入れてくれました。しかし、後から、そのスラム街ではシンナーがいけないものだと思われておらず、彼らはそれを使用したことで陽気であるということを知りました。そういった子どもたちを保護する団体もありますが、更生しても彼らの帰る場所はスラム街であり、また同じことの繰り返しになってしまうそうです。このような環境を変えるためには、人々に正しい知識を提供して改善していく必要があります。そして、私たちが上からの立場で意見を言うのではなく、同じ目線になって一緒に考えるという姿勢が大切だということを知りました。そこで学んだことは日本に帰ってきて、在日外国人の子どもたちの託児のボランティアに生かすことができている。実際に現地に行くことで、言葉では表現することのできない経験ができるし、途上国には先進国にない良いところがたくさんあることを知ってほしいです。

「先進国の支援に疑問を持つ」 LA 学群 3年 国際協力専攻 上原翔太さん (フィリピン研修 2013、ウガンダ研修 2013)

研修に参加し実際に途上国の社会の現状をみることで、「何かをしてあげたい。」というより、「私たちが何かをしなければならない。」という気持ちを持つようになりました。研修では多くの人の話を聞きました。フィリピンでは、先進国による開発によって環境が破壊されており、その開発によって利益を得ているのはフィリピンではなく先進国だというケースも少なくないことが分かりました。またウガンダでは、植民地支配を通じて植民地支配国の文化や言語が伝わり、ウガンダの伝統的な文化を壊し、民族を離れ離れにしているということを知りました。研修を通して、開発や西洋の文化を取り入れるなどの、先進国が行っていることに疑問を持つようになりました。先進国の考えや意思を押し付けるのではなく、相手のことを知り、相手のことを考え、その上でできることがないかを探ることが大切であるということを知りました。



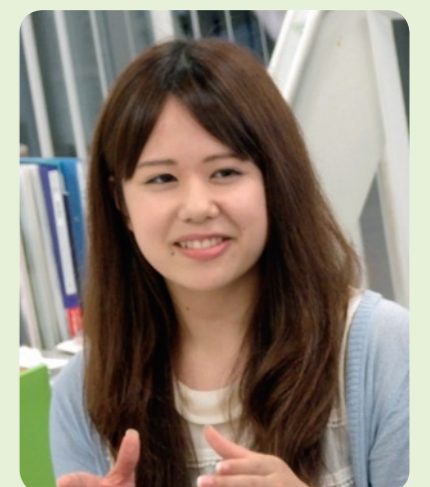
「人助けをしたい」 LA 学群 3年 国際協力専攻 鈴木浩平さん (フィリピン研修 2013、ウガンダ研修 2013)

元々人助けをしたいという気持ちと、海外に行ってみようという気持ちがあったので、これらの研修に参加しました。しかし実際に研修に参加することで、人助けは困っている人に対して助けてあげるという上からの立場ではなく、同じ立場で考えなければならないことを学びました。フィリピンでは今、ごみ山を巡る問題があります。フィリピンではごみを焼却処理することができず、そのまま積上げて処理するため、ごみ山ができてしまいます。ごみを人のいない場所に積んでいくことでその場の処理はできますが、今の子どもたちが大きくなったときに住む場所がなくなったり、環境が悪化したりするのではないかと思います。そうやって、環境問題が起きていくのだと思いました。研修を終えて、フィリピンの社会の現状について調べたいこともできました。また研修で学んだことを、周りの人々に伝え、知ってもらうことが自分のできることであり、大切なことだと思います。



「日本の貧困も知る」 LA 学群 3年 国際協力専攻 花塚理沙さん (フィリピン研修 2012、ウガンダ研修 2013)

小学生のときにアフリカの子ども兵について学ぶ機会があり、同じ人間なのにどうして彼らと私たちの生活がこんなにも違うのだろうと疑問を持ちました。実際に自分の目で途上国の現状を見たり、現地の方からお話を聞きたいと思い、この研修に参加しました。研修に参加する前は、貧困は途上国だけの問題だと思っていました。しかし、見えづらいうえに同じように日本にも貧困があるということに気づきました。帰国後は、日本の路上生活者を支援する活動に参加し、日本の貧困について知ることができました。それまで、貧困は関係ないという認識が自分の中にあっただことに気づくことができました。ウガンダでは有機コットンを栽培している農家さんとそれを加工している工場を訪問しました。私たちの着ている服が誰の手によってどのように作られているのかを知ることができました。このように、私たちの生活は見えにくいところでたくさんの人々とつながっているということを実感しました。研修で学んだことをいろんな人と共有したり、これからも考え続けていくことが、今の自分にできることだと思います。



2. 桜美林大学での環境の学び

桜美林大学大学院国際学研究科国際協力専攻（地球環境問題研究）

桜美林大学大学院国際学研究科国際協力専攻

桜美林大学の大学院は、日本で数少ない独立型大学院です。すなわち、学士課程（=学部・学科）の上に大学院研究科や専攻を設ける屋上型大学院ではなく、学士課程の学習内容や学問領域に必要以上に縛られることなく、自由に学習や研究に取り組むことが可能であるという優れた特徴を發揮しています。

桜美林大学大学院には、国際学研究科、経営学研究科、言語教育研究科、心理学研究科、大学アドミニストレーション

ン研究科（通学課程と通信教育課程）、老年学研究科があります。このうち、国際学研究科国際協力専攻は、国際的な視野に立ち、国際社会の変化に柔軟に対応できる思考と行動力を併せ持った国際協力分野の高度専門職業人の養成等を目的としています。

現在、3人の修士2年生（2014年度）が環境問題をテーマに研究に取り組んでいます。

「フィリピン沿岸部における廃棄物問題と貧困 バターン半島を事例に」

修士2年 石田侑莉さん



卒業大学：桜美林大学リベラルアーツ学群
（基礎数理専攻）

大学2年と4年の時に参加したフィリピン国際協力研修を機に、フィリピンの環境問題や貧困問題について研究を続けています。2014年3月からはフィリピンに滞在し、調査対象地域の家庭ごみやリサイクルについて調査をしています。

フィリピンのスモークマウンテンと呼ばれるパヤタス最終処分場は、今では多くの人に知られている事実です。今では規制が厳しくなったものの、未だウエ

ストピッカーとして生計を立てている人々は少なくありません。これは地方に行っても同じです。それに加えて、沿岸部になると、道も細く複雑なため、収集が困難で、収集システムが働かず、住民はゴミを海岸に捨てたり、自家処理をしたりと本来の廃棄物処理がされていません。そこで、家庭ごみと3Rに関するアンケートを各地域の住民とジャンクショップを対象に配布し、沿岸部の収集システムの仕組みやリサイクル方法、自家処理の割合などの現状を調査し、埋立て処理の限界や雇用問題について解析し、焼却処理方法の導入の提言をしていきます。

「日本における自然学校から見る日本型環境教育の知恵」

修士2年 符瑞さん

卒業大学：天津外国語大学

はじめまして、中国からの留学生の符瑞です。天津外国語大学大学院の日本語言語学専攻の学生で、2013年4月に修士課程ダブルディグリーというプログラムで来日しました。環境教育に非常に興味を持っているため、桜美林大学大学院の国際協力の環境コースを希望しました。

現在、多くの国は経済発展と同時に公害や環境破壊に直面しているため、環境教育の必要性和重要性がますます認識されています。日本においては、公害や自然破壊を背景として、1960年前後から環境教育が広がりました。環境教育は、学校教育において行われるだけでなく、自然学校という組織によっても進められました。自然学校は、より参加型の活動を行い、児童生徒だけでなく、社会人も対象としており、人々の環境意識を高めることに大きな役割を担っています。そこで、私は自然学校を研究対象とし、日本の自然学校の教育面と社会面の成果を分析するとともに、国際協力・国際交流と高齢化社会に着目して、自然学校が直面している課題を明らかにします。これらにより、日本型環境教育の知恵を明らかにし、黎明期にある多くの国々の環境教育に日本の経験知をどのように活かせるかを提言します。



「自然湧水の水質とその季節変動の解明および発展途上国における上水道管理への応用」

修士2年 高橋正太さん

卒業大学：桜美林大学リベラルアーツ学群（環境学専攻）

2009年の入学から数えると、もう6年間も大学にいますので、最近顔の知らない後輩から一方的に知られている現象によく出会います。

学部生時代は、環境専攻の学生として過ごす中でECO-TOPプログラムも修了し、環境のキーワードと過ごしました。

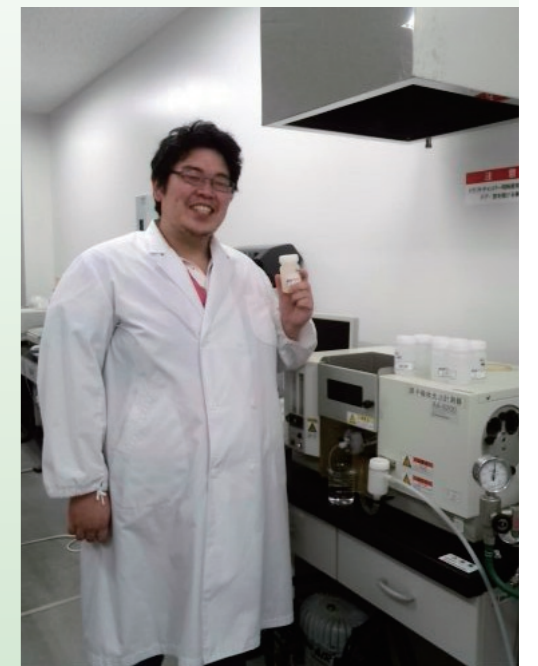
現在は、環境と国際協力の2分野に跨る形で日々を過ごす他、この環境報告書の学生編集委員としても活動しています。

修士課程では、卒業研究のテーマである「自身の居住する地域の自然湧水がどのようにして季節変動を起こすか」をさらに発展させて自然湧水や地下水にまつわる研究を続けています。

現在は、居住する地域の自然湧水の季節変動の更なるデータ収集や、国際協力の観点からフィリピンなどの発展途上国における地下水の管理について研究しています。

フィリピンをはじめとする多くの発展途上国では、そもそも水資源の管理をしていなかったり、先進国からの援助で機材はあっても十分に満足な性能を發揮していないなど、問題は山積しています。

それらの問題を鑑みつつ、卒業研究から継続して獲得した研究データを基礎として、モデル地域のフィリピンにおいて、どのような水質管理が有効かを探っています。



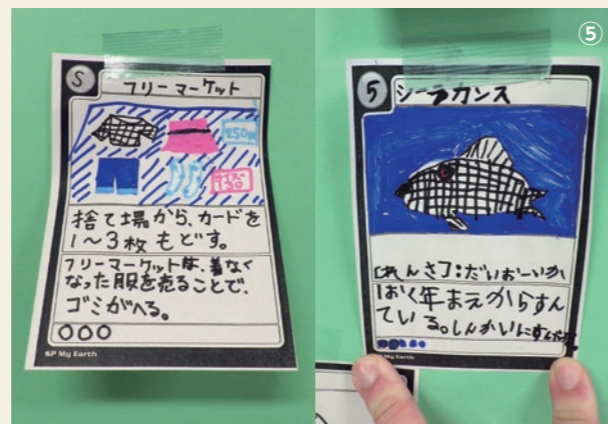
3. 桜美林大学の環境に関する社会貢献

小学生向け公開イベント

桜美林大学環境研究所は、経済産業省資源エネルギー庁のプロジェクトであった「エネルギー環境教育地域拠点大学」の指定を2008年度に受け、2009～2011年度の3年間、「大都市近郊地域の特性に対応したエネルギー環境教育プログラムの開発と実践拠点の構築」をテーマに、小学校・中学校・高校等の教育関係者も参加した研究会の開催、教材の開発などによりエネルギー環境教育プログラムの開発を行いました。このプロジェクトは、3年間で大学として周辺地域への教育支援の基盤を形成

し、以後は大学独自に教育支援活動を行うという趣旨でした。そこで、2011年度より、それまでに整えた設備や技術を活用し、範囲もエネルギー教育から理科・環境教育に広げた公開イベントを実施しています。

2013年度は、春休みとなる2014年3月29日に、「こどもサイエンス実験・観察・工作教室」を開催し、近隣小学校の児童に体験授業や理科・環境関係の実験の体験をしていただきました。来場者は小学生53人、保護者を含め合計120人でした。



写真：① キャンパス内の植物観察ツアー ② 手回し発電機の作成
③ ソーラーカー工作で原理の説明
④⑤ 環境カードゲームマイアースで、対戦後に自分でカードを考えてもらう
⑥ 様々な風車の工作

高校生向け環境科学講座「ひらめき☆ときめきサイエンス」



日本学術振興会の研究成果社会還元・普及事業「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」の補助を受け、5回目となる高校生のための環境科学講座「大気科学の最先端～天気予報と気候変動～」を実施しました。2013年11月9日に4人、11月10日に4人の受講者がありました。

明日の天気予報はそれなりによく当たりますが、一週間先の予報はどうでしょう？一週間先の天気予報が難しいのに、100年後の気候をどうして予測できるのでしょうか？「天気予報と気候変動」では、天気と気候に関する実験、天気予報モデルを利用した数値予報、全球気候モデルによる地球温暖化シミュレーション、気象観測データの分析を体験していただきました。

境川クリーンアップ作戦

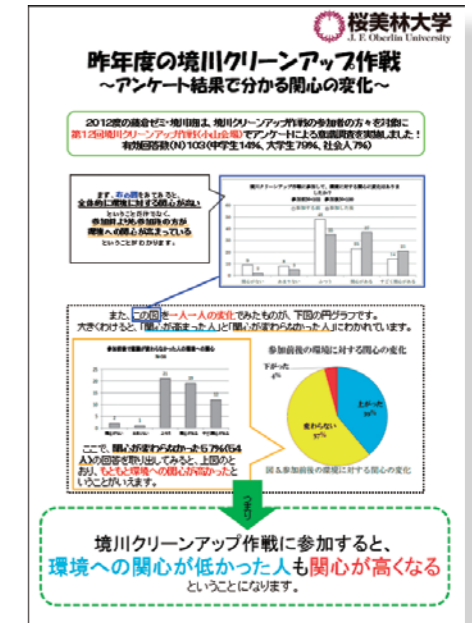
2013年7月28日に行われた、相模原市・町田市が後援する「境川クリーンアップ作戦」に本学から1,325人の学生と教職員が参加しました。

このイベントは、町田市と相模原市の間を流れる境川の清掃活動を通して、環境保全だけでなく、生活圈や経済圏を共有する町田～相模原の行政区分を超えた交流とまちづくりを目指した活動です（表紙・裏表紙参照）。

また、事前に関心を高めるため、7月17日～29日に小田急百貨店町田店9階で展示が行われ、本学からも藤倉ゼミが境川の水質やクリーンアップ作戦の効果などについて展示発表を行いました。

作戦当日は晴天に恵まれ、桜美林大学からは、10会場に45団体（桜美林中学校・高等学校を含む）が参加し、境川の美化に取り組みました。

この清掃活動を通じ、本学がキャンパスを置く、町田・相模原両市の近隣自治会や他参加団体の方々との交流が生まれました。



<本学からの参加団体> 順不同

アーチェリー部、サッカー部、男子バスケット部、落語研究会、モダンジャズ部、美術クラブアトリエ部、陶芸部、アメフト部、合気道部、中高サッカー部、演劇部、柔道部、空手道部、硬式庭球部、バドミントン部、ラグビー部、ゴルフ部、沖縄エイサー部、軽音楽部、チアリーディング部、野球部、女子ラクロス部、ソフトテニス部、女子バスケット部、弓道部、ボランティア部、中高科学部、大学祭実行委員会、CREAM、少林寺拳法部、男女ソフトボール部、茶道部、写真部、大学祭実行委員会、男子ラクロス部、剣道部、藤倉ゼミ、陸上競技部、ODC、スキー部、地域社会貢献班、男女バレーボール部

環境研究所 公開講演会 シリーズ「原発問題を考える」

第1回「原子力と人類は共存できるのか -核エネルギー利用の技術と倫理を問う」

講師：田中三彦（東京電力福島原子力発電所事故調査委員会（国会事故調）元委員）

開催日時：2013年5月31日（第1部：公開講演会、第2部：講師を囲む座談会）

参加者数：約200名



第2回「原子力と人類は共存できるのか -日本はチェルノブイリ原発事故からなにを学んだのか-未来を創る子どもたちのために」

講師：田中 優
 （『子どもたちの未来を創るエネルギー』筑摩書房2013、
 『放射能下の日本で暮らすには？』子どもの未来社2013の著者）

開催日時：2013年10月29日

参加者数：約130名

参加者のご意見（アンケートより一部抜粋）

- 3.11の問題があった直後には、多くのメディアが取り上げたが、今も危険な状態なのに取り上げないのは疑問。田中先生の話聞き、とても説得力があった。もっと多くの人に知ってもらいたい。
- 日本に生きていて福島原発はもう完全だと思っていたのが本音で、正直なにも心配なんかしていなかった。状況がここまで深刻だとは思ってもみなかった。
- どこまで信じて良いのか分からないが、知らないことばかりであり、とてもためになる話ばかりであった。自分の考えが変わっていくのを実感させられた。
- 今までどこか遠い存在のように感じながら原発事故を考えていたが、放射能下で暮さねばならない現実と、これからの私たちの生き方に、深く大きな課題を突き付ける講演内容だった。



- 今日の講演を伺って、使用済燃料の処理が上手くいくことを願う。これから危険を伴うし、気を付けて生活しないとイケない。
- 「原発に向かい合って自分が行動していく」そのとおりで、今日の話聞いて確信を持った。自分でできることはやっていきたい。

◆本講演は、参加者のご要望と講師のご快諾のもと、YOUTUBEに掲載されています。

桜美林大学 原発問題 田中優 で検索してください。

桜美林大学環境研究所 公開講演会 シリーズ「原発問題を考える」とは

桜美林大学には、特定分野の研究活動の活性化と深化を目的とした組織として、研究所およびセンターが学内に設けられています。その一つが桜美林大学環境研究所で、2008年度に設置されました。

環境研究所ではこれまでも公開講演会を実施してきまし

たが、2013年度からは、東京電力福島第一原子力発電所の事故を改めて考え直すことを目的として、さまざまな立場からこの問題に関わっている方々を招聘し、シリーズ形式で講演会を開催することを企画いたしました。

講演会とアクティブラーニング

第1回公開講演会 司会 中島吉弘（桜美林大学リベラルアーツ学群教授）

田中三彦氏の公開講演会に参加し、私が担当する授業（2013年度春学期「社会思想史」「人文科学基礎（現代社会の問題と哲学・思想）」「環境倫理学」ほか）の「授業時間外学習」（Supplementary Activities）として位置づけた「アクティブラーニング・ワークシート」（任意選択）を作成・提出した多くの受講学生の中から、本人の許諾のもとに、課題項目Ⅲの記入事例を1つ紹介します。

なお、この「アクティブラーニング・ワークシート」は、以下の3つの課題項目から構成されています。Ⅰ「田中三彦氏の講演（話やスライド、質疑応答など）から、重

要と思われる部分を順次、以下のスペースにメモしなさい。Ⅱ「講師にぜひ聞いてみたい疑問や伝えたい意見を以下にメモしなさい。また、質疑応答の時間には、このメモをもとに積極的に質問をしなさい。Ⅲ「原子力と人類は共存できるのか-核エネルギー利用の技術と倫理を問う」を演題とする講演は、これまでに授業で学んだ社会思想や、さらにはあなたの学びやライフスタイル、未来社会のあり方の選択とどのように結びつくのか？考察し、簡潔にまとめなさい。」

「Ⅲへの応答：今回の講演会を聞き、原子力の危険性はもちろん強く感じたが、それ以上に（判断の軸）はどこにあるのか？という事を考えさせられた。日本で、日常生活を過ごしている中で、いままではこのような原子力のような危険な問題をあつかう時は、あたり前の事実として、一番にくる判断軸は、『安全』であり、一番重みのある『個人の命』に重しを置いて、問題を議論し、方向を決めてきたのだと思っていた。

しかし、今回の講演を聞き、企業によっては判断軸が企業の存続にあり、人によっては自分の名誉に判断軸があり、国によっては国家が正しいと思わせる事が一番重要な事であると知った。彼らにとって『命』や『安全』という言葉は、二の次であり、大きな力に巻かれていく事が正義であり、一番正しい行動なのだ、と

感じてしまった。

このような世の中、社会だからこそ、国民ひとりひとりが大きく目を見開いて、世の中を見つめる必要があると思う。そして、その時必要になってくるのが、今、授業で学んでいるような過去の偉人たちが残してくれた言葉であり、思想であると思う。これを自分の中に詰め込み、溜め込む事が、とても大事な武器になる。この武器が、時には正しい判断軸を与えてくれ、時には正しい道を示してくれる道標となり、背中を押してくれる力になる。

今、私達は民衆としてではなく、『本当の意味での個人』として生きる力が必要であり、その力となってくれるのが、授業で学んでいる社会思想である。私は時代に流されるのではなく、生きていくために、今後も、このような思想を自分の中に溜め込んでいきたいと思う。」

（リベラルアーツ学群4年 宮坂紘平）

「アクティブラーニング」は、当事者である学生にとって学習効果が極めて高く、かつ永く記憶される授業手法であることはすでに各方面で実証されています。今回、私はこの授業手法に準拠したワークシートを作成し、シラバスにある項目「授業時間外学習」として積極的に位置づけ、さらに他の理解ある複数の教員とも連携しつつ、私の担当する授業科目の枠を超えた形で学生へのアク

ティブラーニングを柔軟に仕掛ける試みをしました。第2回の田中優氏や第3回の早野龍五氏の公開講演会に際しても、この手法を改良しながら同様に試み、初回と同じく大きな手応えを得ることができましたので、この機会に是非、この事実を広くシェアすべく、報告させていただきます。

4. 学生主体の活動

インタビュー：学生編集委員 リベラルアーツ (LA) 学群3年 山下大貴

「人にやさしく、環境にやさしく、大学祭を楽しく」

大学祭実行委員
磯部睦望さん

大学祭実行委員とは、大学祭における実行や運営を担当する学生団体です。さまざまな部署が存在しており、仕事に応じて学生たちが活動するほか、地域交流や大学祭の広報活動として地域のイベントにもボランティアとして参加しています。

大学で毎年行われている大学祭。そ

の開催中に学生たちの出店や来場者からは大量の廃棄物が発生します。今回そこに注目し、どのような対処をしているのかについて、大学祭実行委員磯部睦望さんにお話を伺いました。

磯部さんの所属は総務であり、仕事は幅広く、縁の下の方力持ちといった存在の部署です。総務はさらに11の班に区切られており、今回はその中のごみ班の環境活動を中心にお話を伺いました。

大学祭におけるごみ班の主な活動

は、大学祭開催中に設置されているごみ箱の前で、来場者から出されるごみの分別を行うことです。分別方法は、燃えるごみ、ペットボトル、缶、ビン、汁物、危険物と細かく指定され、出店した学生たちのごみについても、正確に分別されているのか丁寧に確認作業を行っています。

また、大学祭実行委員は、毎年大学の近くにある境川で行われる「境川クリーンアップ作戦」にも参加しています。大学祭実行委員は、グループによる境川のごみ拾いはもちろんのこと、グループのリーダーを務め、効率よく活動できるようにまとめるといった役割を担っています。

その他にも、地域のボランティア活動の一環として、毎年相模原市で行われている大野北銀河まつりでは、来場者のごみ捨て場でごみの分別を行っています。

大学祭実行委員が大学内で主に活動する本部の中でもごみの分別が行われていました。缶、ビン、燃えるごみ、燃えないゴミ、段ボールと細かく分けられ、使われなくなった電化製品もリサイクルショップに持っていくという環境面での意欲も見られました。



「農学部がないのに！？農業を通して人と自然とふれあいたい」

アグリアクション
代表者 野村 彩さん
鈴木空也さん

アグリアクションとは、桜美林大学のキャンパス内に開墾した畑で無農薬の野菜を栽培している農業サークルです。夏野菜を中心にトマト、きゅうり、ナス、すいかなど、育てたい野菜を学生が選び、畑を耕し、栽培するという学生が主体となった活動をしています。

育てた野菜は自分たちで食べたり、大学祭にその時期の旬な野菜を調理して提供したりしています。自然とふれあえるのはもちろん、地域の方からアドバイスやご指導を受けるなど、いろいろな人とコミュニケーションがとれるのもこのサークルの魅力です。

また、サークルに所属している学生は、最初から畑に興味があったのではなく、「汗を流したい」や「大学なのに畑？」といった興味本位で加入した人がほとんどです。

2013年度の活動のトピックスは、大学の生ごみ（調理くず）のリサイクルです。アグリアクションでは、2012年度までは肥料を購入して畑で利用して



いましたが、2013年度からは、桜美林大学内に設置されている生ごみ処理機で学内の食堂の調理くずを処理して土壌改良材にしたものを肥料として用いることにしました。その結果、生ごみからできた土壌改良材だけですべてを賄うことができ、肥料代が浮きました。生ごみ処理機でできる土壌改良材は肥料としても質が良いので、今後も積極的に利用していきたいとのこと。

野菜が多く収穫できるのはもちろん、仲間と一緒に体を動かすことで喜びを分かち合えるという点もこのサークルの醍醐味です。

今後の目標としては、部員を増加して作業効率の向上を目指すとともに、野菜以外にも果実を栽培したり、地域の方に野菜を食べてもらったりして地域交流にも力を入れていきたい、と答えていただきました。

「Enjoy Ecology Everyone をモットーに！」

環境サークル エコレジ
代表者 大久保潤さん

エコレジとは、「レジ袋削減」「学生の環境意識の向上」「学生の取り組みから環境意識を世間に波及」という3つの活動目標を中心に2008年4月に創立されたサークルで、合言葉の「Enjoy Ecology Everyone」をモットーに現在も日々活動しています。

エコレジの主な活動として、レジ袋削減プロジェクトと、地域のお祭りのボランティア活動としてのプー

ス展示があります。

レジ袋削減プロジェクトは、キャンペーン呼びかけ期間を2週間と定め、大学生協の店舗内と店舗外で不要なレジ袋削減の呼びかけをして、学生達に環境意識の変化をうながす活動です。また、地域の祭りのボランティア活動は、子供を対象とした啓発ブースの設置です。ビニールプールに入った多種多様なゴミを正確に分別できるかななどのゲームで、遊び感覚で子供たちに参加してもらうことにより、小さなころから環境に関



心を持ってもらうことを目的としています。このように、大学外での普及活動も積極的に行っています。

エコレジが特に力を入れていることは、レジ袋削減の一環としてのエコバッグの無料配布です。大学内でエコバッグのデザインを公募し、その中から選ばれた2つのデザインで100枚ずつ作成し、大学生協前で1週間限定の無料配布を行いました。

また、地域の方々にも、無地のエコバッグにスタンプを用いてオリジナルエコバッグを作ってもらいたいという活動を通して、レジ袋の削減と

ともに環境意識の向上を目指しています。

今後の目標としては、エコレジを継続させ、エコレジを通してレジ袋削減やエコバッグの普及に積極的に取り組み、さらなる学生達の環境意識の向上に努めていきたいとのことでした。

環境報告書 2013 年度版を読んだ感想 (授業「環境マネジメント論」)

環境問題に関心がある人から見ればとても完成されていて読みやすいと感じるが、関心がない人から見ると、難しい用語がある。解説があるとよい。また、他大学のようにカラーにすると読みやすくなる。私も桜美林大学がこれほど環境保全に取り組んでいるとは知らなかったし、そういう学生がほとんどであると思う。自分の大学について詳しく知ることにより強い誇りを持てるようになれると思う。少し堅いイメージがあるので、それを払拭できればもっと良くなると思う。(4年男子)

文章やグラフだけのページが多いので、写真がもっと多いと良い。自分の内定先の環境報告書はどんなことが書いてあるのか気になった。(4年男子)

環境報告書の目的に「在学生の環境に関する意識を高める」とあるが、これは全く達成されていないと思う。この報告書の存在が知られていないのはもちろん、知っているも見ただけの印象から手に取る人は少ないと思うから。もっと明るい印象で手に取りやすいデザインが良い。また、取組の成果の結果が記載してある方がわかりやすい。他大学にあるように、目標の横にわかりやすく「達成」と書いてあるとわかりやすい。(3年女子)

教職員が環境についてどれくらい理解をしていて、どう思っているかなどを載せてほしいと思った。環境報告書をいろいろな授業で配布すれば、環境報告書を知るきっかけになると思う。(3年男子)

最初のカラーページは読む人を引きつけると思う。キャンパス内の植物や虫など興味を持つ人も多い内容で良い。大学の特色なども書かれているので高校生にもぜひ手にとってもらえたら良いと思う。(3年女子)

自宅に郵送される学内広報誌と一緒に送付してはどうか。学生に一番伝えたいなら、もっと学生の写真や活動を増やしたりカラーページを増やすのも良いと思う。日常的に学生が利用するものや出してしまうごみなど、読んでもらう「つかみ」としてもっと情報が欲しいと思う。(3年男子)

省エネ対策や節水が思っていたよりもなされていた。しかし、学内のトイレの手洗い場の蛇口がしっかりしまっておらず、流し放しの時が多いので、自動センサーにするなどすればさらに節水になると思う。(3年男子)

一般の人向けでもあるのだから、館の名称にはふりがなをつけるべき。桜美林大学はごみ箱設置数が多くポイ捨てが少ないと思うので、それも載せるとよい。写真展をやって、側に置いてあれば手に取るのでは？(国内交換留学生)

環境報告書 2013 年度版 (概要版) を読んだ感想 (授業「専攻入門 (環境学)」)

学生主体のサークルの存在を知らなかった。雨水利用などは環境の授業をとらなければ知らなかった。もっと大々的に学生に知らせしてほしい。(4年男子)

エコマップに載っていた内容のほとんどが初耳で、桜美林は環境に配慮した大学だったんだと気付かされた。(3年男子)

思った以上にエコに取り組んでいて驚いた。エネルギーは25%も削減してすごいと思う。せっかくなのでこのまま保てると良い。(2年女子)

写真付きでとてもわかりやすい。ただし、もっと改善点をあげた方がいいと思う。これからはどこが変えていけるのかということを発表すべき。(2年女子)

新しい建物は取り上げているが、図書館などの古い建物の環境対策が書かれていない。各エネルギーの消費の内訳などが見られるとよい。(2年男子)

ハイブリッドバスなどエコな取組を初めて知った。分別ごみ箱は、分別があまりなされていない面があるので、これからの課題ではないか。学長のエコキャンパスというフレーズがすてきだと感じた。(1年女子)

消費エネルギーは大幅削減したのに結果があまり目立っていないので、もっと結果を目立たせることで見る人の関心を引けると思う。(1年男子)

写真が多く、何が書いてあるのかわかりやすい。しかし文字の大きさが小さいのでやや見づらい。(2年女子)

裏面のマークについての説明もあると勉強になると思う。(1年女子)

在学生でもこのような取組を知らなかったので、オープンキャンパスでもツアーをするなどして高校生に見せられたら良いと思う。(1年女子)

今回、環境報告書編集委員になって本当に良かったと思っています。私は主に国際協力フィールドワークについて担当し、実際にフィールドワークに参加した学生の方々にインタビューをすることで、インタビューの大変さはもちろん、それを通して他国の社会状況や日本がどれだけ恵まれているかを知ることができ、私達にできることを知ることができました。

実際に制作に携わったものが一冊の本として完成したことを嬉しく思います。しかし、この報告書の存在を知っている人はほとんどいないと思います。一人でも多くの人に手にとってもらい、読んでくださった方、一人ひとりが少しでも環境へ意識を向けてくれれば良いと思います。

リベラルアーツ学群2年 小泉穂波

「初めて」がほとんどであった、今回の活動。環境報告書作成にあたり、私の担当である学生団体にインタビューすると、彼らの熱意が感じられました。

それを、どのようにしたら読者に伝えられるかといった葛藤は学生生活を通して初めての経験でした。

また、編集委員の仲間たちと真剣に意見を言い合うという場もこの活動でなければ味わうことは無かったと思います。

今回の活動を通して、大学のことを知るとともに本や雑誌を作成する苦勞も知りました。

最後に、インタビューに協力してくださった学生団体の代表者の方々、環境報告書作成に協力してくださった皆様、ありがとうございました。

リベラルアーツ学群3年 山下大貴



私たちが学生編集委員です！

今回、初めて環境報告書の作成に携わり、貴重な経験をさせていただきました。本が好きで編集や環境に興味があったので編集委員に応募しました。新設トイレの記事では原稿を作成する難しさを学びました。廃棄物排出量のデータをまとめてグラフを作る際に過去のものと比較することで細かい変化を見つけられ、以前よりも増加・減少した数値を見ることができ、その要因を考える姿勢を身につけることができました。

この経験を通して、桜美林大学の環境活動に対する理解が深まり、共存していくことの大切さを学びました。ご協力していただいた団体、先生方、大学施設関係者の方々、編集員のおかげで作り上げることができました。ありがとうございました。

リベラルアーツ学群2年 岡崎愛梨

昨年に引き続き、2年目も続投しました。今回も主には写真を担当し、インタビューや施設視察の時に撮影を担当していました。

その他、この2014年度版で環境報告書が5周年を迎えたので、5周年ロゴなども考案したのですが、結局使われませんでした。悔しいです!!

今年は全編フルカラー化にも挑みましたので、例年とは違う環境報告書になりました。昨年との変化、読みやすさの向上を感じて頂ければと思います。

大学院国際協力専攻修士2年 高橋正太

編集後記

桜美林大学環境研究所は、学内教員の研究組織として、2008年度から活動を開始し、2010年度からはエコキャンパス活動の一環として環境報告書の作成を開始して、本年度が5年目にあたります。

東日本大震災以来、大学全体で取り組んできたエネルギー消費量削減については、2011年度の大幅削減以降、僅かずつですが増加しており、今後も継続的な取り組みが必要です。また廃棄物発生量は2013年度には減少しましたが、それを継続できることが今年度以降の課題となります。

今年度は新たに「桜美林大学花ごよみ」を掲載しました。

そのほかにも、環境について学ぶ大学院生の紹介など、新たな試みを取り入れています。これらの情報が学内外で活用されることを期待するものです。また本年度版も学生編集委員の活躍が原動力になっており、この環境報告書が本学の環境活動、教育効果、人材育成効果等、多くの面で有効に機能することを願っております。

末筆で恐縮ですが、本報告書の作成にご支援をいただいた学外、学内の各位に対して、深く御礼を申し上げます。

2014年10月

桜美林大学 環境研究所長 片谷孝